

第 33 期新潟市社会教育委員会議 会議概要

第 3 回社会教育委員会議	
開催日時	平成 30 年 10 月 31 日 (水) 午後 1 時 30 分～午後 4 時 30 分
会 場	新潟国際情報大学国際交流センター セミナールーム
出席者	<p>【社会教育委員】 伊比 宗宏、岡 昌子、小川 崇、雲尾 周、笹川 博人、杉山 節子、 田中 一昭、田中 宏和、山田 久美子、渡邊 彩 計 10 名 (欠席：本間 莉恵) * 敬称略</p> <p>【事務局】 地域教育推進課長、中央公民館長、中央図書館長、中央図書館館長補佐、 文部科学省人材政策課職員 1 名、生涯学習センター所長、所長補佐、 生涯学習センター職員 4 名 計 11 名</p>
内 容	<p>1 開会</p> <p>2 事例研究 赤塚地域の方と新潟国際情報大学が連携して活動している市民プロジェクト「新潟砂丘遊々会」の活動について、同大学生の磯貝さんから紹介がありました。 (国際情報大学情報文化学部の小林教授、澤口教授同席) 【「過去から未来へみんなでつなぐまちづくり」—新潟砂丘遊々会の取り組み—】</p> <p>○赤塚の地域活動参加の動機 長岡出身で元々地域活動に興味があり、地域活動に積極的に取り組む小林研究室を選んだ。新潟市西区農政商工課の赤塚地域のマップづくり事業の話聞き、赤塚・佐潟地図研究会に参加。その後、新潟市の水と土の芸術祭 2018 市民プロジェクトで新潟砂丘遊々会として活動してきた。</p> <p>○遊々会設立に至る取り組み ・「佐潟ぐるら今昔 20 年」 ・「佐潟英口中韓仏語訳パンフレット」 ・「赤塚・佐潟地図研究会」(新潟市西区農政商工課の事業) 「コミュニティ佐潟」、「赤塚・中原邸保存会」、「佐潟と歩む赤塚の会」、「赤塚郷土研究会」、「赤塚・佐潟歴史ガイド」などの会員をメンバーとして「赤塚・佐潟地図研究会」が立ち上がり、そこに新潟国際情報大学の学生がメンバーとして参加して赤塚地域のガイドマップを作成した。地元の方や、ほかの地域の方を呼んでウォーキングができるようにと作成したガイドマップの活用のため、水と土の芸術祭の市民プロジェクトに申し込み、新潟砂丘遊々会を設立して 1 年活動してきた。</p> <p>○遊々会の活動 ・砂丘ウォーキング 3 回実施し、好評であった。地元の人だけでなく、ほかの地域の方も参加し、一緒になって赤塚を満喫できた。赤塚地域は、マツクイムシなどによって松が枯れてなくなってしまったが、丘の周りにだけはまだ松が残っており、保全の必要性を改めて感じた。ウォーキングを通して地元の人や、ほかの地域の人と一緒にふれあい、地域の魅力を歩きながら探ることができ、すごくいい経験ができた。</p> <p>・シンポジウム「未来につなぐ赤塚の魅力」 地元の団体の会長や会員の方と、地域の魅力や自分の想いを共有し、これからの赤塚を良くしていく勉強会として開催した。本学教授で新潟市の潟環境研究所客員研究員の澤口先生、また日本フットパス協会理事、NPO 法人</p>

<p>内 容</p>	<p>「みどりのゆび」の理事兼事務局長の神谷由紀子さん、路地連新潟代表で日和山五合目館長の野内隆裕さんの 3 名を講師に、それぞれいろいろな分野のお話を聞き、これからの赤塚について勉強した。</p> <p>第 2 部では「赤塚の未来を考える」と題し、地元の団体の 5 名をパネラーに、まちづくり学校の山田さんをコーディネーターとして、地元の方の意見、考え、思っていることを直接聞ける場としてパネルディスカッションを行った。</p> <p>アンケートも好評で、ウォーキングの継続を希望する声など聞くことができた。</p> <p>シンポジウム後のワークショップでは、3 回のウォーキングやシンポジウムに参加された方を対象として、シンポジウムでは話し足りなかった部分や、これからの赤塚をこうしていきたいというものを、それぞれホワイトボードに書いて発表し、それぞれの想いを共有、共感した。</p> <p>○赤塚をつなぐもの＝人や時間</p> <p>地域の皆さんが熱い想いを抱いて、それぞれ手を取り合って歩んできた活動に地元愛を感じる。また、過去から現在、そして未来に向かって、地域の移り変わりを感ずることができるというのも赤塚の魅力。</p> <p>○赤塚の宝物の構造</p> <p>赤塚地域の魅力、良さの構造を見ると、自然環境だったり、地元の文人などの文化財、中原邸など、社会基盤、制度資本だったりするが、一番下の基礎となっている部分は、やはり誇り、地元の郷土愛であろうと思う。こういった構造を、自分たちの活動でつなげていき、これからの赤塚をより発展させていきたい。</p> <p>○宝物の継承＝地元の課題</p> <p>良さ、宝物を継承していくことが課題の一つとなっている。若い人にどんどん参加してほしいという想いが、地元、地域の人にあり、今回、後輩と地域で活動したが、もっと学生にも参加してほしいという想いがあり、次の世代にも広めていくということがこれから大事だと思っている。宝物というのは人々の信頼関係や熱い想い、そういった温かいものによって価値を増していき、社会的共通資本として次の世代に引き継がれていくと考えている。</p> <p>○地域活動に参加して</p> <p>学生が社会人に交ざって事務局の担当の一人として活動をするのは大変さもあったが、最後は皆さんの笑顔を見ることができ、約 2 年間頑張ってきて良かったと感じた。</p> <p>○「赤塚のビッグピクチャーを描きませんか？」</p> <p>佐潟のワークショップは「2050 年の佐潟の将来像を考える」だったが、2050 年の赤塚はどうなっているか、どうしたいのか、一人一人の想いを叶えられるように皆さんと手を取り合って協力し、市民プロジェクトだけでなくこれからの活動を発展させていきたい。</p> <p>【質問・感想等】</p> <p>○元々地域活動に興味があるということだが、何か背景はあるか。 ⇒中学生の時に生徒会で地元のボランティア活動にも積極的に参加し、清掃活動では気持ちいいとか、やってよかったとか、きれいになってよかったという思いができる場があり、地域の活動はいいなと思っていた。大学で地域活動が活発な研究室もあることを知り、改めて参加してみたいと思った。</p> <p>○大学生は何人くらい参加していたか。 ⇒大学生は自分を含め 3 名と、一緒になって活動したという意味では、法政大</p>
------------	--

<p>内 容</p>	<p>学の学生が 6 人くらい参加していた。</p> <p>○ウォーキングの日は皆、土曜日の設定だったと思うが、小・中学校にも案内し、参加はあったか。小学生などもたくさん参加するようになれば、自然と地元も増えるのでは。</p> <p>⇒PRはしたが、小・中学生の参加は 2 名だけ。事業としてウォーキングで何時間も歩くとなると、参加しづらかったかもしれない。</p> <p>○ゼミに分かれてから 2 年間活動した学生たちは結局、市外から来て、市外に出て行くという形になり、地元へ循環的に残ることはないか。</p> <p>⇒ [小林教授回答]</p> <p>研究室でずっと地域活動をやってきたのではなく、たまたま色々な形で地元のほうから声があり、段々入ってきたという経緯がある。現時点で研究室全員が地域活動に従事している訳ではなく、希望のあった学生にマッチングをしている。継続性については課題と思っている。澤口先生、社会学担当の小宮山先生や複数の教員で連携を取りながら進めている。本学は圧倒的に越後線沿いや新潟市内から来ている学生が多いため、そういう意味では、継続的に学生も参加できるような仕組みや運営はやっていきたいと思っている。</p> <p>○この活動に参加してみて、地元を見る目が変わったか。地元の活動に関わりを持ちたいという想いが芽生えたか。</p> <p>⇒元々地域に興味があったが、この活動を通してできた法政大学の学生や地元の人とのつながりをこれからも大切にしたい。法政大の学生も赤塚のことを好きになってくれ、社会人になっても「たまには来よう」と話している。また、地元は長岡花火が有名で、勤める会社も長岡甚句を踊ることもあり、今度は長岡市の地域活動にも携われると嬉しく思っている。</p> <p>3 報告事項</p> <p>(1) 第 18 回新潟県社会教育研究大会 糸魚川大会参加報告</p> <p>報告 1 に基づき、山田委員が参加報告、事務局が分科会報告を行いました。</p> <p>○第 3 分科会「地域活性化のために立ち上がった七人のサム・ム・ラ・イ」</p> <p>⇒サムライが社会教育委員のことで、弥彦村は 7 人いる。最近、交代で若い委員が 2 名加わり活性化に力を入れるようになった。地域を盛り上げる魅力的な動画を募集し、ユーチューブなどに掲載して弥彦村の PR につなげるという取り組みを、社会教育委員が企画しているという発表があった。そのあと参加メンバーで、弥彦村でどういう取り組みをしたらいいか案を出す分科会だったが「弥彦村はすごく色々な活動をしているので、ハードルが高いです」「逆に自分たちの市町村で、とても参考になった」という意見が多かった。</p> <p>【主な質問・意見等】</p> <p>○公民館の課題すなわち社会教育の課題として指摘のあった「首長部局への移管」というのは、どういう意味か。</p> <p>⇒公民館について言えば、教育委員会部局で所管をしているところが多いが、それを首長部局のある部署に、その役割を移管するということ。教育行政ではなく一般行政部局への移管という意味である。</p> <p>(2) 第 60 回全国社会教育研究大会 青森大会参加報告</p> <p>報告 2 に基づき雲尾議長、報告 3 に基づき杉山委員が参加報告を行いました。</p> <p>【主な質問・意見等】</p> <p>○来年が兵庫県で、次が新潟県。新潟は新潟県で一つか。</p>
------------	--

⇒新潟は市町村の連合で県連があり、新潟市は政令市なので外れている。PTAと同じで、どこまで協力を求められるか定かでない。県の主催で、アオーレがメイン会場になっている。分科会を協力してという話になるが、具体的な話には至っていない。

○第 3 分科会について [枝並所長参加報告]

「地域全体でサポートする家庭教育 民間や学校と連携した家庭教育支援について考える」

⇒一つ目は八戸市の NPO が、親子の居場所がある拠点の施設の委託業務を受けて色々な活動をしているという事例発表であった。一人親が多いとか生活保護がナンバーワンとかで、家庭教育をしっかりとしていけないといけないという市の考えもあり、家庭教育学級をしたり、双子の家庭の人たちを集めた会をしたりしているという話だった。

もう一つの事例は、鹿児島島の始良市の社会教育委員が発表。子育て条例を作ったため、条例に基づいて社会教育委員も家庭教育の活動をしていかなければならないということで、主に第 1 と第 3 の日曜日の 4 時から、社会教育委員がラジオに登場して家庭教育の相談を受けたり、イベントの連絡をしたりと、ラジオ番組を持っているということだった。皆さんから「そこまでやっているの」と反響があった。ほかのところも色々活動している委員もたくさんいるという発表もあり、行政としても、あとは委員としても、どういふうにこれから活動していったらいいのか、どのように協働して社会教育を進めていったらいいのかというところは、どこの市町村も迷いがあり、今、課題となっているところなのだろうと感じた。

4 協議事項

(1) 第 49 回関東甲信越静社会教育研究大会 長野大会事例発表 (案) について
資料 1 に基づき、小川副議長が説明しました。

【主な質問・意見等】

○31 期まで遡っての説明なので、建議という形で、次期生涯学習推進基本計画を作っているという説明に、教育委員会事務局が作った生涯学習推進基本計画ではないという説明を入れてほしい。

⇒建議は建議で、厳密に言えば生涯学習推進基本計画ではないということを文章として入れる。

(2) 建議テーマの趣旨について

資料 2 に基づき、建議テーマについて枝並所長が説明しました。

【主な質問・意見等】

○文中の「他都市への流出」の、他都市は要らない。都市ではないところへ行っていることもあるので。「少子化や人口減少社会に加え、若者の流出が進んでいる。社会教育の活動者自体も減少し、地域において新たな担い手の育成が課題となっている。」と 1 文目は変えるといいのではないか。

最後、「そのために社会教育として何ができるのかを調査・検討する」ということで、我々は「できる」ことを調査・検討したいのか、例えば「何をすべきか」とか、「何を実際にしているのか」とか、ここの文言を「できるのか」でいいのか。

○最初の部分、「一方」と次につながっているので、担い手を育成していくことが重要だし、他方では、既にある学習活動を学びにつなげていくこともという二本柱なのかどうか、確認したい。

⇒「世代を超えた」と言った場合に、世代なので 20 歳、30 歳くらい離れたイメージのものだけではなく、もっと極端に高齢者と小学生くらいに離れている場合もある。既存の活動であると、例えば 5 歳、10 歳くらい下の人たちが次々に引き継いでいくようなイメージもあるということで、その違いである。二本柱と言えば二本柱であり、すごく離れているのと、少し離れたくらいとの違いで、やり方も違うだろうということも含めてである。

○最後の「そのために社会教育として何ができるのか」、これは趣旨の中にも答えが書いてある。社会教育として何ができるか、最初の段落の後継者の人材育成、二つ目は地域づくり、それから三つ目に活動等の担い手になる人を生み出していくこと。問いかけが文末にあるが、その答えが前段に出て、「調査・研究をし」もこの趣旨に書かれている。この二つのところに辿り着いてしまうのではないか。

人材育成とか地域づくりのために何が必要かということを考えるのであれば、今の時代における社会教育の必要性は何なのかということ趣旨の中にしっかり盛り込んでおかないと。昔の戦争が終わってすぐの公民館活動運動が始まったときの状況とは違い、これだけ民間で、学びたいときに好きなように学べる環境の中で、本当にそれを地域のためにとか、次世代のために返していくための担い手を育成するという観点で考えると、現在の社会教育の必要性というのを趣旨の中にしっかり盛り込んで、そのために後継者、人材の育成と地域づくりを社会教育でどのように行っていくかということかなと感じた。

○最後の「そのために社会教育として何ができるのかを調査・検討する。」という、称は誰なのか。行政として社会教育の施策をどういうふうに創り上げていこうという方向性なのか、社会教育委員が、こういうふうに活動しましょうととれないこともない。やるべき中身が目標的なことを細分化して新たな担い手の育成という大目標に向かって細かい目標を立てていくのか、踏み込んで具体的な事業まで検討するのかという辺りも疑問である。位置付け的には行政にこういうことをしてもらいたいということを書くのが建議とは思っている。

○社会教育委員の役割というものを考えれば、自分が何をやるかということではなく、社会教育委員が市当局に、こうするためにはこうしてほしいという進言なり提言なり建議を行うという仕事なので、自分がどう関わるか一人ひとりの取り組みではないことは間違いない。新潟市全体の後継者がいないとか、地域づくりができていないとか、そういう課題に対して市として、こういう方策・方針をもって取り組んでいただきたいというものを作るものと思う。

○そこにおいて、例えば社会教育委員自身がこういう実践をしているとか、地域の中で、こんな形で世代を超えた学びの継承もあるとか、いろいろな世代の学びを充実させる部分も、いくつか細々とはあるけれども、このままでは広まらないので、それを広めていくような、支援していくような施策を市には求めるし、社会教育委員としても、そういうことを広報していくというスタンスだと思ふ。

第 31 期の建議の中では、施策について市がどう対応しているか進捗状況を報告してとあり、この会議の中でも、報告がずっと続いてきている。チェック項目としては機能しているが、さらにそこから 4 年経つ中で、世の中で特に、この部分は必要になってきたという重点化を 32 期でも行い、33 期でも、要するにすべての施策は 31 期の中で挙がっているが、その全部を網羅的に同じようにやり続けるわけではなく、32 期では学びの循環ということに重点を置いて、そこをさらに強化するにはどうすればいいかという話をして、そしてこの 33 期の中では、次世代育成というところに重点を置いて、その部分をさらに強化して

いくためにはどうすればいいかということで建議を挙げていくという趣旨で進めるという形でもよろしいか。内容的には、建議テーマを少し入れ替えて、出だしのところで、もう少し社会教育の必要性のスタンスをきちんと書くという形で進めるということ。

概ね合意はできたということで、今期の建議テーマ自体は「社会教育による次世代育成について」ということで、今言った内容で確認がとれたので進める。

(3) 調査・研究のための視察について

資料 2 に基づき、事務局から「視察先候補一覧」について説明を行いました。

【主な質問・意見等】

○9 番の新潟市若者支援センター「オール」に興味がある。

○興味がある若者がやってきて参画をして、物事を行うというのは新鮮な感じがする。学校現場でやると、こうならなければいけないという落としどころがあるので、だいたい決まったように上手にできるというものがほとんど。できれば何もないエリアの中で、自然発生的に人々がやって来てという部分は興味がある。

⇒オールの担当課の地域教育推進課からオールの役割と機能について説明。

若者支援センター「オール」は、社会になかなか行けない若者が来るところで、対象は 15 歳から 39 歳の、社会に適應できなくて俗に言う、ひきこもり状態や、就業できない状態の若者がまず相談員に相談に来る。これが相談機能。次に、その若者が少しでも人と関わってエネルギーを蓄えたいということで同じ悩みを抱える若者と時間を一緒に過ごす、これが居場所機能。そして社会に巣立っていくために行商体験や農業体験をして社会性を身に付け、ようやく一歩社会に出ましようとしていく事業という取り組みがあり、この 3 種類を主にしている施設。次世代の育成という点で課題を抱えている若者はどう頑張っているのかを見てみたいということであれば適した施設であり、その際、単に施設の見学がよいのか、あるいは行商体験とか農業体験を頑張っていこうとしている姿を見たほうがいいのか、そういうところも指摘をいただきたい。

○19、20、21 と、白根地区公民館と白根高校が組んで、地域のアイデアを出し合うというものに興味がある。

○27 番の「そらいろ子ども食堂」は、新潟市の中で唯一、学生が主としてやっているというのを聞いていて、一度行きたいと思っていた。

○23 番の中之口公民館の「中之口大学地域活性化事業」について、若者グループとのヒアリングを通し、取り組みを見てみたい。

⇒意見を元に、視察先は事務局から改めて案内する。

○尚絅学院大学の松田道雄特任教授について [伊比委員情報提供]

「だがしや楽校」という本を出している。以前は中学校の先生で、退職前に学校を辞めて社会教育、生涯学習にずっと取り組んでいる。社教主事講習に出たのがきっかけで、こういう関わりは学校の中だけではできないということまで飛び込んだというお話。東京のど真ん中で地域のつながりも何もないところで、飲み屋にフラッと入ったら、その飲み屋で一人一芸みたいなものをやっていた。ウクレレを弾いたりマジックをやったり、そういう人たちに、持っていることを、もう少し地域の方々に知ってもらったり、自分が勤めている学校に来て、子どもたちに見せてもらうことはできませんかというのが始まり。学校や商店街を舞台に、それぞれ地域の人たちの中で、自分の学びの成果、続けてきたものを披露し合う中で、その人たちが自然発生的に、今度、いつ、どこでこのイ

第 33 期新潟市社会教育委員会議 会議概要

	<p>ベントをやってみようというふうになっていった。それで地域のつながりができたり、まさに後継者の育成につながったり。ただの理論だけではなくて、実践があって、東京のど真ん中でも人のつながりができると。</p> <p>第 32 期のときに、地域を舞台にした循環型生涯学習を考えた際、新潟でも隣同士、どういう人が住んでいるか分からない中で、地域のつながりを作ると簡単に言うが、それが一番難しいと委員の中で意見が出た。どんな仕掛けが必要かということで昨年度は分科会の担当で建議のところを相談した経緯があり、この先生の話が面白かったと思ひ挙げた。</p> <p>(4) 社会教育委員会議の日程について 資料 3 に基づき、事務局から次回第 4 回の社会教育委員会議の日程について説明を行いました。 ⇒ 1 月 30 日水曜日の午後 2 時開始に決定。時間は視察かヒアリングにより多少変更する場合があります。</p> <p>(5) 関東甲信越静社会教育研究大会埼玉大会分科会における事例発表・話題提供の希望調査について 資料 4 に基づき、事務局から説明を行いました。 ⇒ 質問や意見はありませんでした。</p> <p>5 その他 事務局から「その他資料」と「その他資料 2」、「その他資料 3」について説明を行いました。 ⇒ 質問や意見はありませんでした。</p> <p>6 閉会</p>
傍聴者	0 名
会議資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事例研究 過去から未来へみんなでつなぐまちづくり —新潟砂丘遊々会の取り組み— ・ 報告 1 第 18 回新潟県社会教育研究大会糸魚川大会参加報告（山田委員） ・ 報告 2 第 60 回全国社会教育研究大会青森大会参加報告（雲尾委員） ・ 報告 3 同上（杉山委員） ・ 資料 1 第 49 回関東甲信越静社会教育研究大会長野大会 開催要項 ・ 資料 1-2 第 49 回関東甲信越静社会教育研究大会長野大会 事例発表概要 発表テーマ『第 32 期新潟市社会教育委員の取り組み』 ・ 資料 2 調査・研究のための視察について ・ 資料 3 第 33 期社会教育委員会議 建議策定スケジュール（案） ・ 資料 4 関東甲信越静社会教育研究大会埼玉大会 分科会における事例発表・話題提供の希望調査 ・ その他資料 総合教育政策局の設置について ・ その他資料 2 総合教育政策局の新設（再編の概要） ・ その他資料 3 総合教育政策局のミッション～再編の目的とこれからの方向性～